



子どもが大人になるとき

津守 真

私はこの頃大人とかかわることが多い。子どもを保育するときと大人とかかわるときとはどこが違う、どこが同じなのかをしばしば考える。

子どもが大人になるとき、何が変化するのかということ、子どもを実体ととらえて、身体面、精神面の变化、異性に対する態度の変化などについて研究することができる。そのような一般的な知識は参考になるが、私はここでは子ども及び大人とかかわる立場から考えることにしたい。



子どもとかかわるときと大人とかかわるときと

1 子どもの仕事をしてきた者が、大人の仕事をしようになって気が付いたこと

子どもの保育の場合には、状況が瞬間瞬間に目まぐるしく変化するから、かかわる者はとても忙しい。大人の場合には、生活も時間もゆっくりしており、かかわる者の動きもゆっくりしている。これは相違点である。しかし事が起きるときは瞬間であり、かかわる者の瞬時の判断と行動が重要である点は共通である。

子どもの保育の場合には、関係の中で保育者がどのように応答するかということが、子どもの世界の大きな部分を占めていた。大人の場合もそれが基本であることは同じだが、環境（住まい、仕事など）をつくることが更に大きな課題となる。どんなに人間関係を良くしても、住む場所を変えないと問題が解決しないことがしばしばある。集団的な施設に住むのか、小さなホームに住むのか、自分の家に住むのかはその人にとって重大である。地域の中の活動の場をつくるのか、同質の人が集まる隔離された場所で仕事をするのかによって、その人の生活意識は変化する。

2 親にとって、子どもが大人になるとき

子どもが中高校生になると、自分とは異質の友達に魅かれ、交わり、家にも呼んで来る。本人もその中でこれまでと違う価値観をもつようになる。親は努力してこれまでとは違う価値観を受け入れなければならなくなる。そして子どもは自らの価値観を



もって親から離れ大人になってゆく。

とくに現代は異質に対して寛容になり、多様なものと共存することを求められる時代である。異質なものを排除して従来型の価値観を守ろうとすると不幸な者をつくりだすことになるだろう。異質なものと一緒に生活するには、個人の側の努力を要する。また、異質な者が一緒に共存する社会の場を必要とする。実際にそれがなんと難しいことか。長寿社会ではその重要性が一層大きくなるだろう。

3 子ども自身が大人になるときの体験

体験は人によって異なり、本人でなければ本当にはわからない。

大人は皆この過程を通っているから、自分自身の体験を顧みるとある程度わかることがある。しかし、ゆっくりと考えないと自分自身の体験でも意識の上に浮かび上がらない。普段は忘却の彼方にある子どもと大人の境目を思い出すことは他人を理解するのに思いのほか役立つものである。具体的な事柄は違っても、底辺には共通の体験があって、互いに理解できるように人はつくられているのだろう。

大人になりきれないとき

1 相手が大人になっているのに、それを認めないとき

ことに、障害をもつ人の場合、「永遠の子ども」と言う風に見て障碍の大人と接す



ることがある。障害をもつ人は、純真で素直であることは確かである。しかし、ことばがきけなくても、歩けなくても、子どもではなくて大人である。ことばを話さなくとも、人間関係の本質を理解していることをいろいろの場面で知らされる。「永遠の子ども」という認識は幻想ではないか。それは必要以上に保護的な態度をつくりだす。障害をもつ人は身体の水準で人間と世界の本質を洞察して、一生懸命に生きていく。

2 未成熟な大人

エリクソンが言うように、成長の各段階を十分に生きることができなかった場合、その部分が未成熟のまま大人になる。だれもすべての面で十分に成熟している人はいない。だれでもある部分で未成熟さをかかえている。それは大人になってから補ってゆくことである。そこに壮年期、老年期の成長がある。

3 大人になるときに、子どもの部分をすべて失うのではない

早く大人になって子どもの原始性や身体性を脱却するのがよいという考え方がある。それは子どもを一段と低い存在とする見方である。自然への感受性、身体による洞察は背後に押しやられることが多いのが現代生活である。しかし、子どもの原始性、身体性を失わずに保つことは人間らしさを保つのに欠くことができない。これは現代の教育の課題である。



子ども時代の記憶は人を元気づける

私は子どものときと、大人になってからとを因果関係で結ぶことはしないことにしている。両者の間にはあまりにも多くの糸が織り合わされている。

しかし、はっきり言えることは、子ども時代の楽しい記憶は、老年になっても心に留まるということである。幸せな子ども時代の記憶がどんなに人間が生きる励ましになることか。エリクソンが人間の生涯の成長を考えるのに、晩年しばしば題材として引用しているベルクマンの映画「野いちごの道」の最後の場面で、老年の主人公のボルクは言う。「私は気が落ち着かず寂しくなると、気を鎮めるために子どもの頃のことを思い出した。今宵もそうだった」と。夜の床の中で、子どものときの楽しかったことを考えると、人は明日を生きる元気を与えられる。幼い子どもを保育するものはだれでも、そのような記憶を人の心に残すことができることを確信してよい。

私がこの文章を書こうとした動機は、障害をもつ子どもがおとなになるときのことであった。考えてみると、それは障害の有無とは関係がない。どの子どもにも、だれにでも共通である。保育ということばも、幼児と大人との間に閉じ込めるのではなく、大人同士の関係にまでひろげてよいのではないかと私は考えている。